

大島商船高専における推薦入学者の特色 —10年間にわたる追跡調査の結果から—

教務主事室

中村次男*・平畑幸作**・吉田郁雄**・古藤泰美**・石田依子**

Characteristics of the Recommended Students in Oshima National College of Maritime Technology: A Report of Survey Result for Ten Years

Academic Dean and Assistants

Tsugio NAKAMURA, Kosaku HIRAHATA,
Ikuo YOSHIDA, Yasumi KOTOH, and Yoriko ISHIDA

Abstract

It is incontrovertible that academic achievement of students in universities and colleges (Ko-sens) has regrettably been decreasing for these years, partly with the declines of applicants for them, and partly with the influence of recent revision of curriculum in the secondary education institutions. Naturally every organization desperately tries to acquire more excellent students. To attain this purpose, student admission system is held in high respect in Ko-sens as one of the means of acquiring more qualified students.

Needless to say, the system of student admission stands on the bases of every reliance upon junior high schools. It may be natural that we are relieved to accept those students who are “witnessed” by school authorities; however, we sometimes encounter the unexpected gap or even trap on the admission system. There seems, in reality, to exist the rigid difference in quality or standard among each junior high school.

In this paper, our efforts are focused on the changes in the academic achievement of the recommended students and the rate of the completion of their school course over the past 10 years from 1993 through 2003. We examine the conspicuous characteristics of the recommended students of our school, and consider what kind of educational lines we should newly take towards the conventional admission system.

Key Words : academic achievement, admission system, recommended students, rate of the completion of the school course

1. はじめに

近年、特に高等教育機関を圧迫している少子化に伴って、中等教育におけるカリキュラムの改訂の影響などで、以前に比較すると大学・高専への入学者の学力が低下していることは否めない。そのような状況下で、いずれの組織も少しでも優秀な学生を獲得しようとするのは当然であろう。この目的において、高専では、いわゆる「質の良い学生」を得る手段として、「推薦入学制度」にかなり依存していると言うことは大袈裟であろうか。

高専における「推薦入学」の基盤にあるものは、中学校に対する信頼であることは言うまでもない。海のものとも山のものとも不明の志願者よりは、中学校長の「お墨付き」のある志願者の方が安心ではないか…これは受け入れる側の心理としては当然かもしれないが、実はそこにとんでもない落とし穴が存在する場合がある。もっとも、中学校の側にすれば、本人の進路希望等を尊重しながら、進路指導を行っているのであって、何も志望校を最初からペテンにかけるつもりなど到底ないのである。しかし、中学校によっては推薦会議などを慎重に重ねて推薦者を選考している学校もあるが、希望し且つ規準に達した生徒をすべて推薦するような、現実的には「自己推薦」の様相を呈する中学校もあるだろう。「推薦入学」といっても、そこには歴然とした格差が存在するのである。我々としては、可能な限り綿密な面接を行う、もしくは作文を克明に読み込むことにより、志願者の適性を判断するしかないのだろうか。

本報告は、本校に推薦で入学した学生に対する追跡調査である。平成6年度入学から平成15年度入学まで、過去10年間にわたって、推薦入学者の成績の推移と成業率に焦点を当てて分析を行った。本校における推薦入学者の特色はどのようなものでしょうか。また、今後の「推薦入学」の方針として、どのようなことに着目していけば良いのだろうか。

2. 推薦入学者の成績の推移

現在、本校では推薦入学者の定員は全体の35%であり、学業成績に対する出願資格は、中学3年間における9教科の学習成績の評定が5段階評定で3.8以上である、ということが規定として定められている¹⁾。学科構成は、商船学科・電子機械工学科・情報工学科の3学科、定員は1クラス40名である。

このような規定から判断すると、推薦入学者は少なくとも3.8以上の評定を得るだけの力のある者ということになる。つまり、換言するならば、受け入れる側の我々としては、調査書の中で中学校

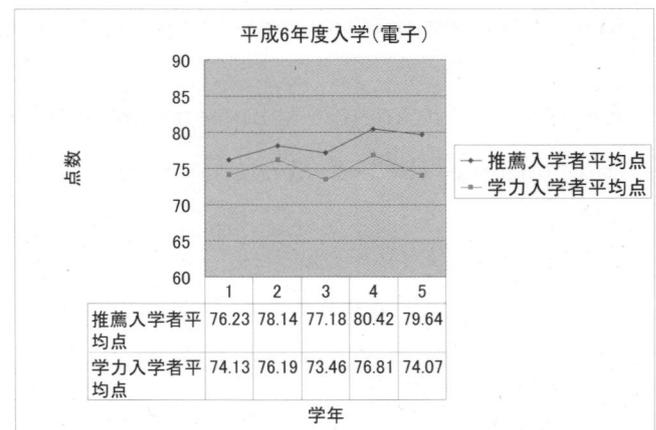
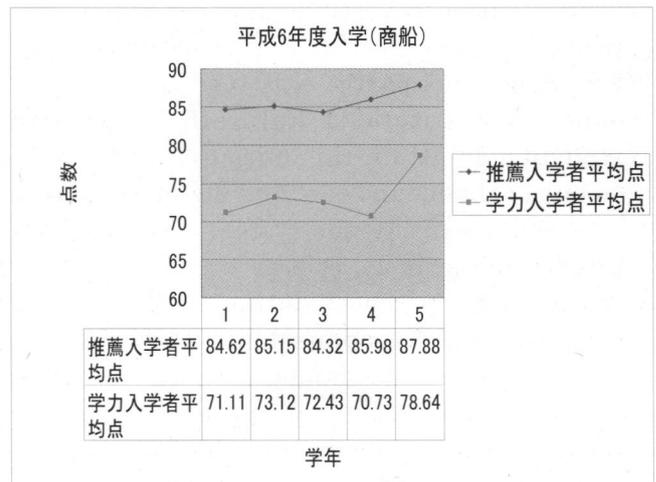
が提供してきた「3.8以上の成績」を信じるしかない。それしか、学力を判断する資料はないからである。たとえば、それがいい加減なものであった場合でも、該当学生が既に入学者として、何らかのリアクションが起こされた後でしかそれが判明することはないだろう。

果たして、推薦入学者は、「お墨付き」が示すとおり、「3.8以上」の成績を保持するだけの能力を備えた者なのだろうか²⁾。本章では、推薦入学者の入学後の成績の推移について、学力入学者と比較しながら明らかにしていきたい。尚、本稿では、均等かつ明瞭と思われる点で、「学年末の平均点」で数値を示していくことを書き添えておく。

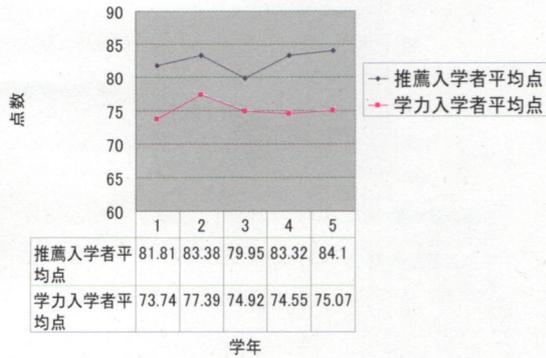
まず以下において、平成6年度から平成13年度に入学した推薦入学者の在籍5年間にわたる学年末平均点の推移を表すグラフを示す。平成14年度及び15年度の入学者に関しては、在籍年数が少ないため、ここでは省略する。さらに、推薦入学者と学力入学者の各学年における在籍者数を示すグラフを提示する。これらの資料を参照しながら考察していきたい。

成績の推移

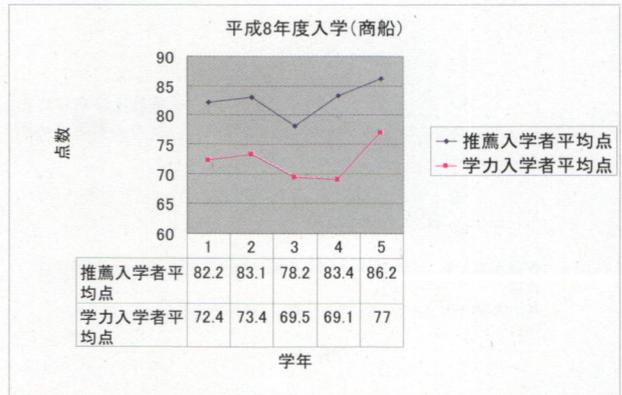
平成6年度入学



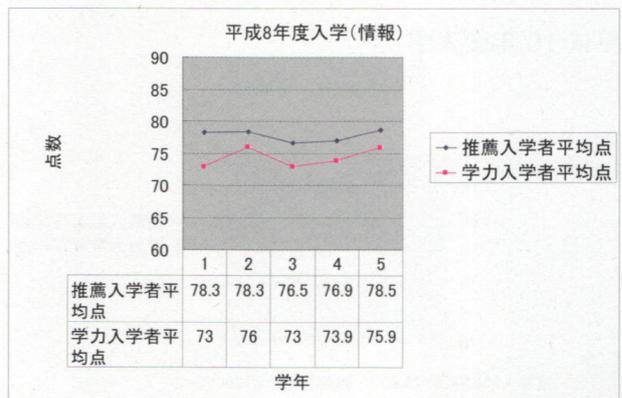
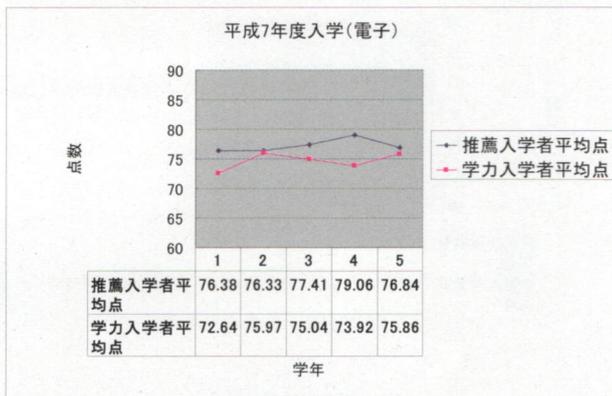
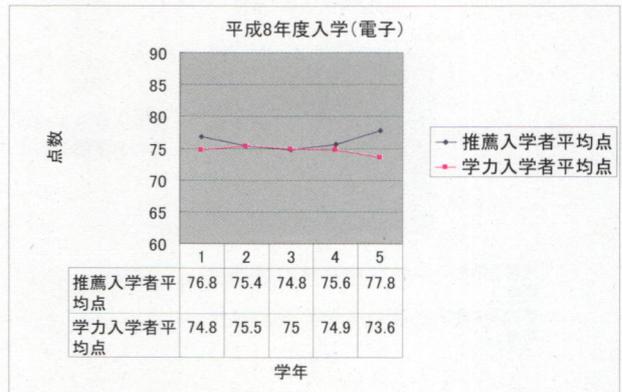
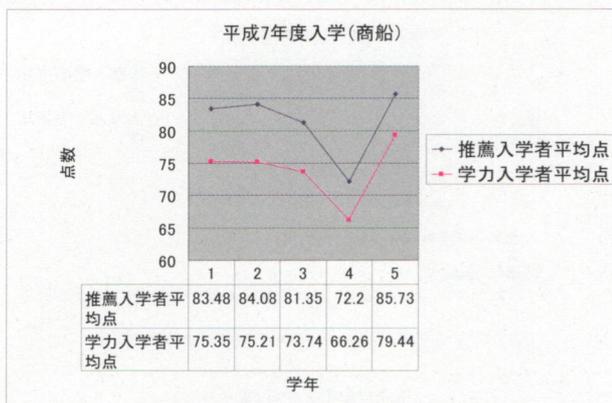
平成6年度入学(情報)



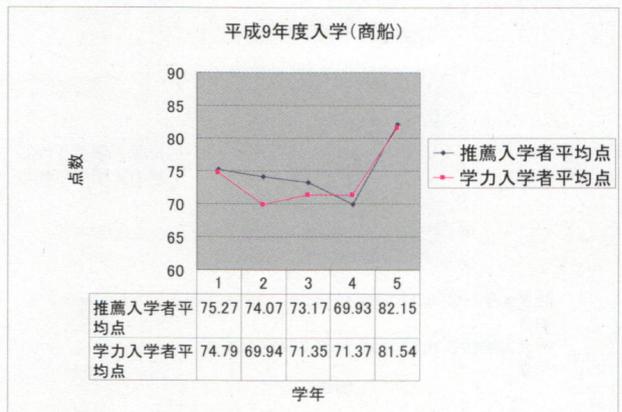
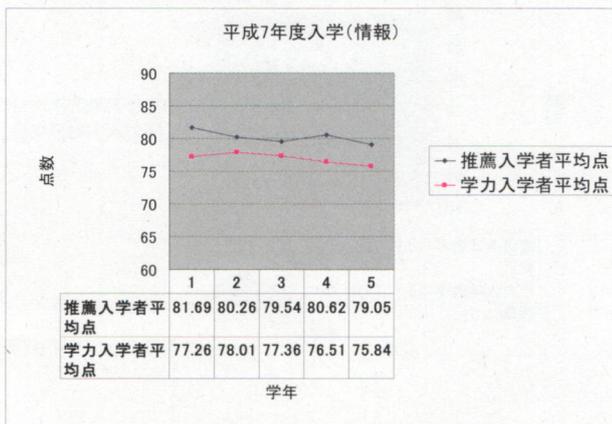
平成8年度入学

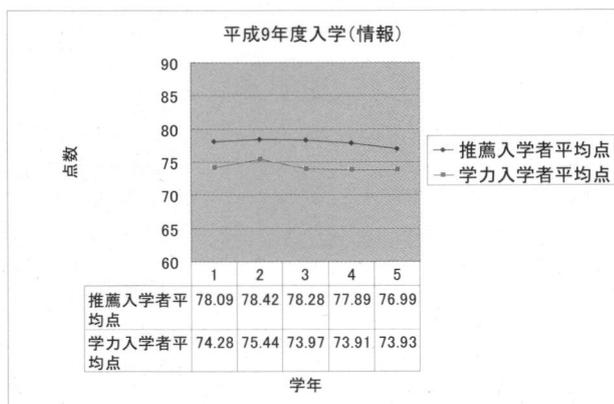
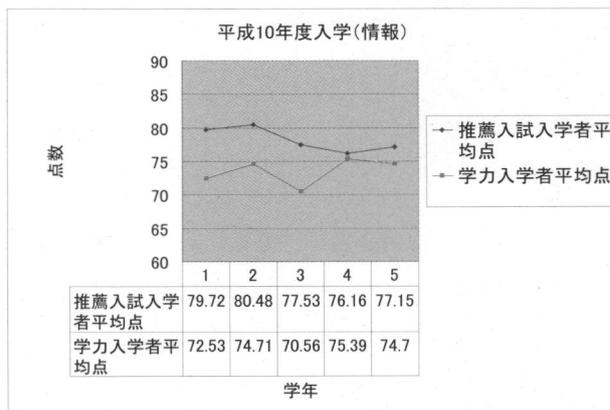
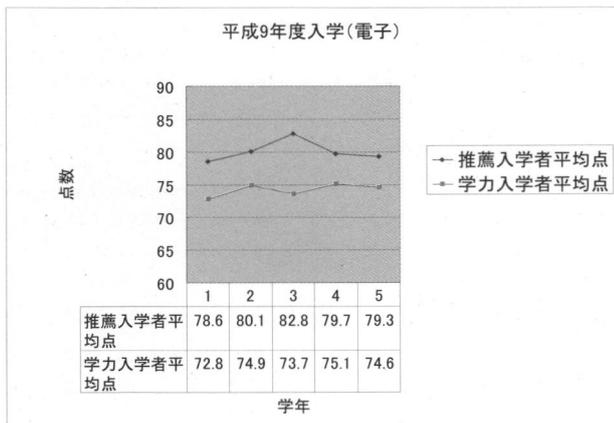


平成7年度入学

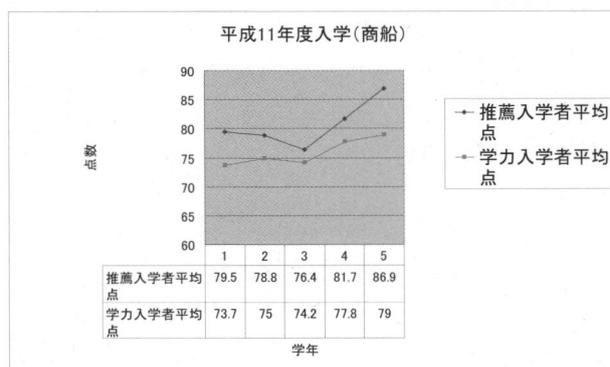


平成9年度入学

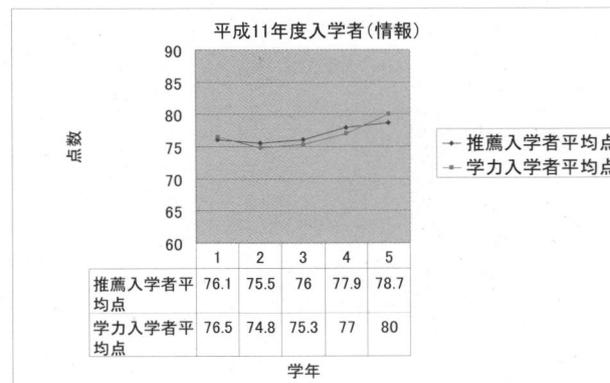
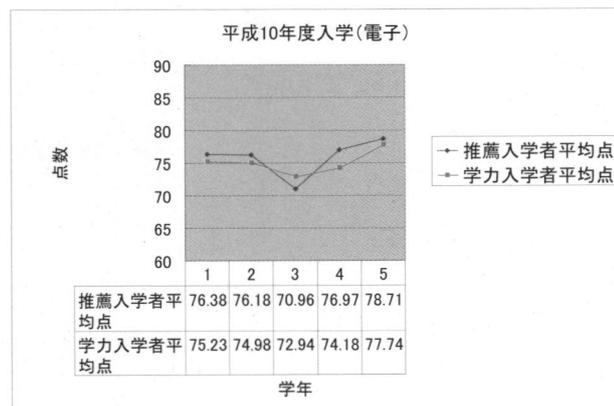
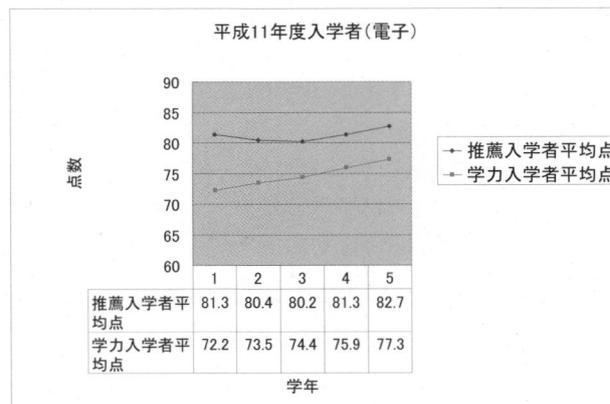
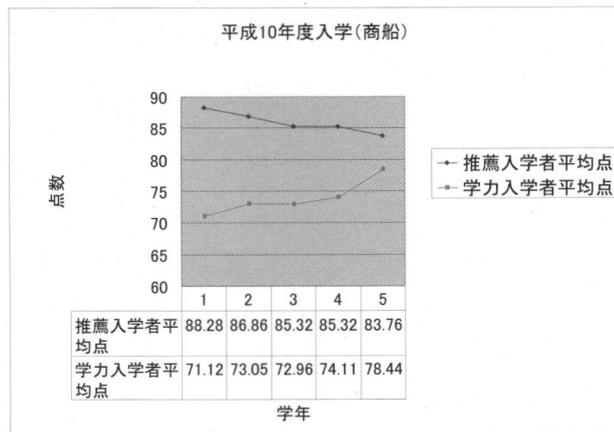




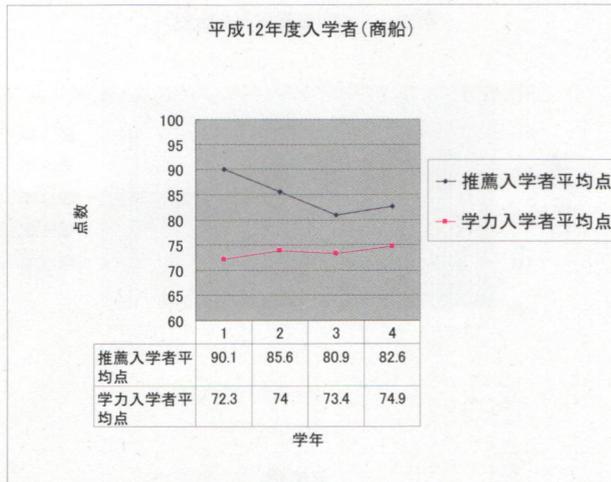
平成 11 年度入学



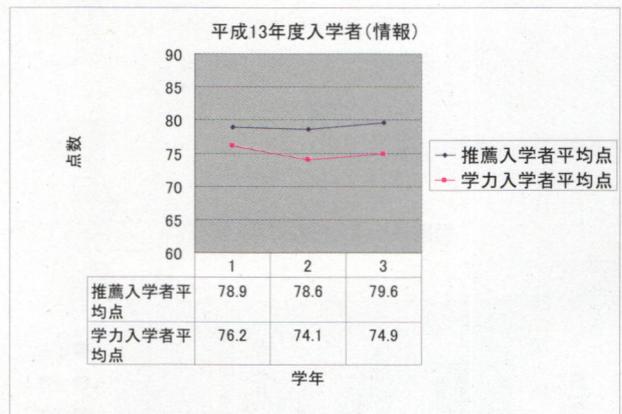
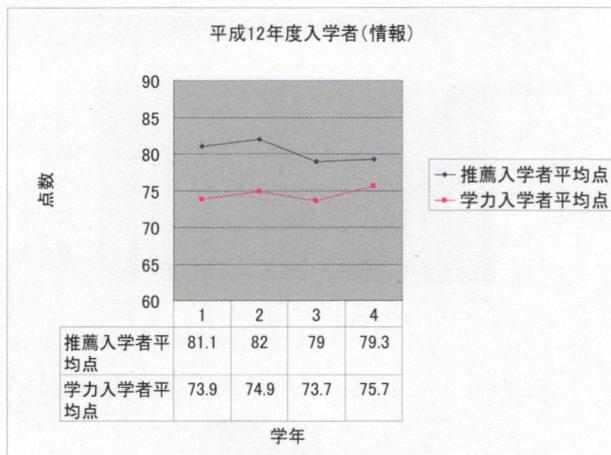
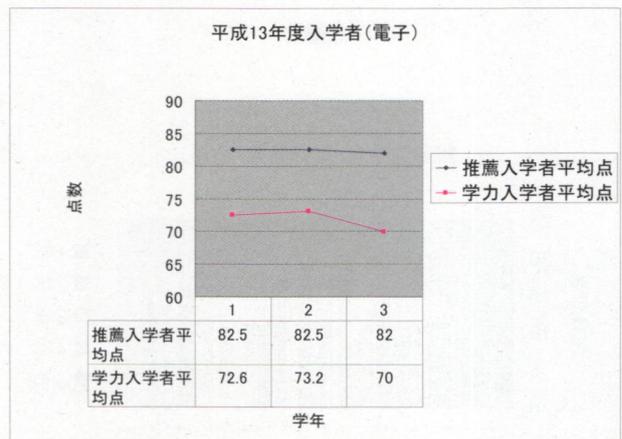
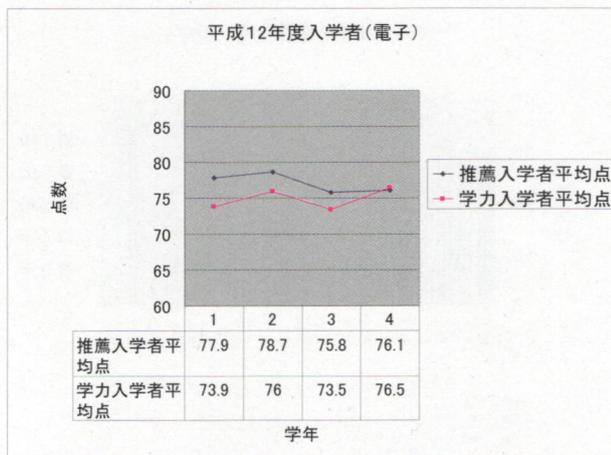
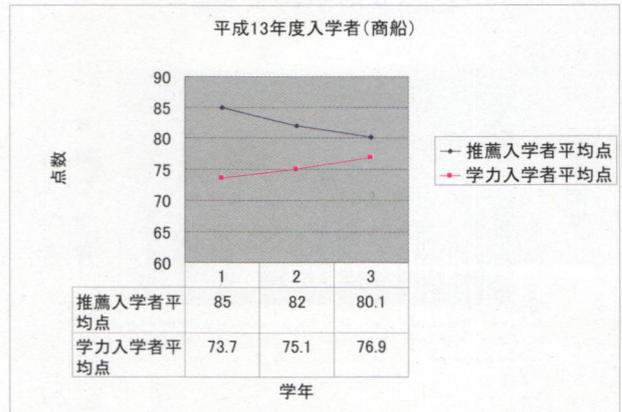
平成 10 年度入学



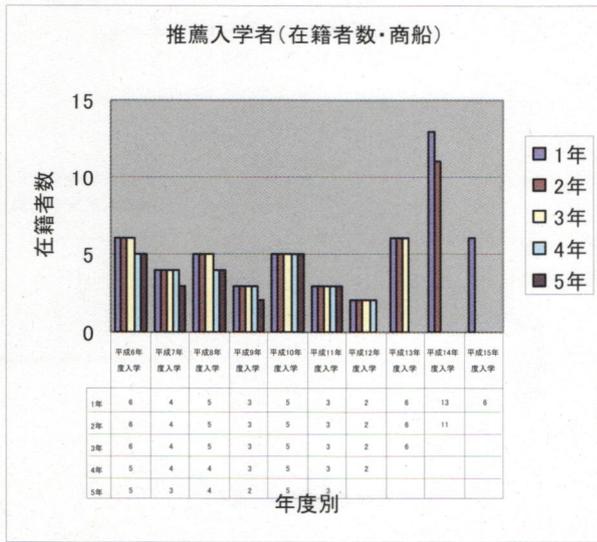
平成12年度入学



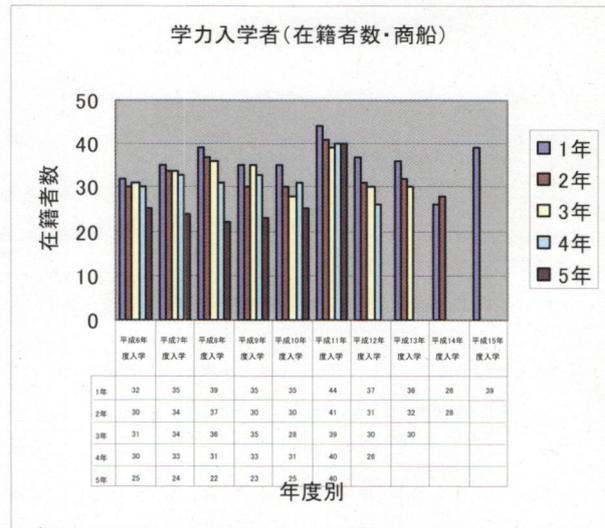
平成13年度入学



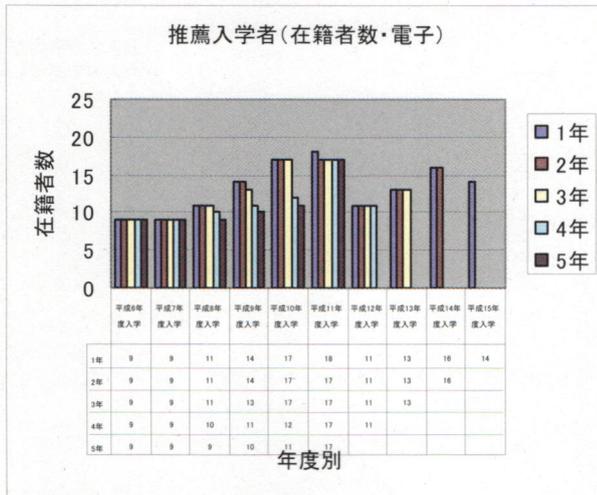
推薦入学者の在籍者数 (学科別)



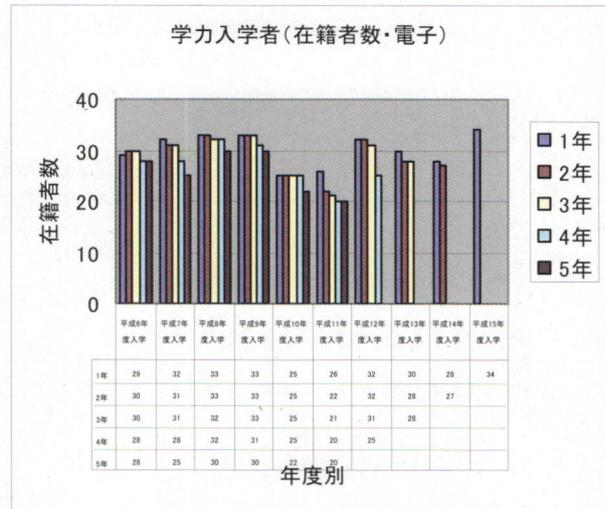
学力入学者の在籍者数 (学科別)



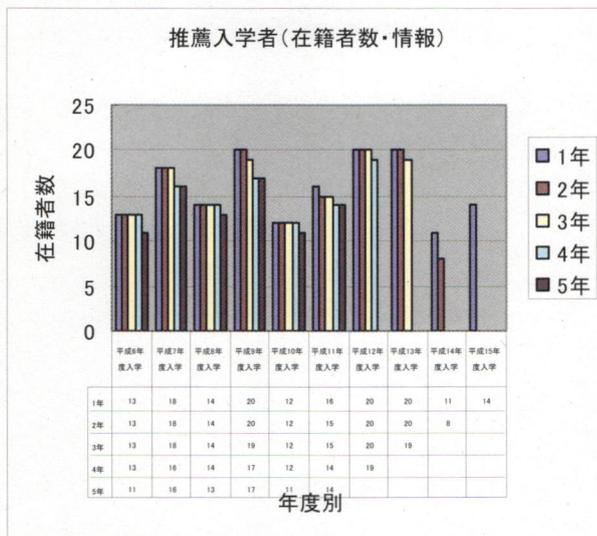
推薦入学者(在籍者数・電子)



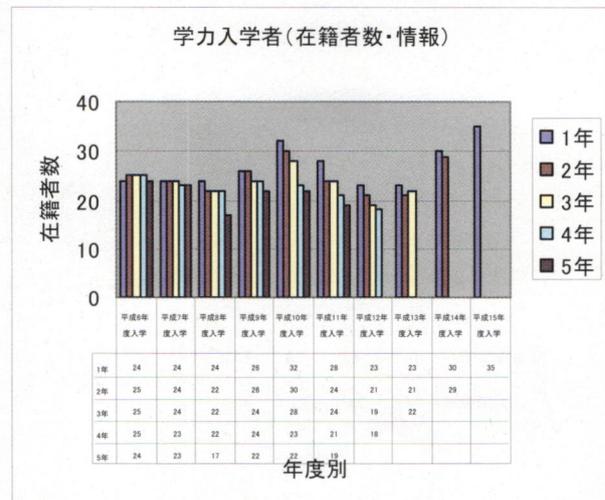
学力入学者(在籍者数・電子)



推薦入学者(在籍者数・情報)



学力入学者(在籍者数・情報)



考 察

一部の例外はあるものの、ほぼ全体的に言えることは、学力入学者に比べて、推薦入学の方が高得点を挙げているということである。もっとも、推薦入学者は「推薦」されて、言い換えるなら、「品質保証書」付きで入学してくるのだから、当然と言えば当然である。問題は、どの年度も、どの学科もこの定義が当てはまっていないということである。その顕著なところから見てみよう。

①推薦入学よりも学力入学者の平均が上回るケース：さすがに、全学年を通じて推薦入学者が下回っているケースはないが、ある一学年において、推薦入学者の平均が学力入学よりも下回っているケースが見受けられる。中でも目立っているクラスを取り上げると、「平成9年度入学・商船」、「平成10年度入学・電子」、「平成11年度入学・情報」が挙げられる。

「平成9年度入学・商船」は、4学年における落ち込みが著しいが、在籍者数グラフの数値が示すように、この年に脱落者が一名おり、その学生の平均が60点に達していなかったからだと考えられる。

「平成10年度入学・電子」に関しては、3学年における落ち込みが極めて激しい。この年の推薦入学者は17名であったが、そのうち6名が中途退学している。うち5名が3学年末に退学しており、さらに彼らの平均が60点に達していないことに起因している。

「平成11年度入学・情報」はどうであろうか。この学年の推薦入学者は、16名。脱落者は2名であるが、該当学生はそれぞれ1学年末と3学年末に退学している。しかし、成績グラフが示す結果は、1学年の出発時から学力入学者が若干上回っていることからわかるように低迷飛行は続けているものの、学力入学者と完全に入れ替わったのは5学年に達してからであって、退学者が出た年には学力との逆転は発生していない。

次に、顕著というほどではないが、辛うじて学力入学者が推薦入学者を上回っているケースを見てみよう。「平成8年度入学・電子」、「平成12年度入学・電子」の二つに着目する。前者は、3学年で、後者は4学年でわずかではあるが、学力入学者が推薦入学者の平均を上回っている。前者のクラスは推薦入学11名中、3学年末に一名の留年者と、4学年末に一名の退学者を出しているが、彼らはいずれも低空飛行を続けている。二人が揃って姿を消した段階で、本来の推薦入学者たる平均に戻ったと考えられる。さて、「平成12年度入学・電子」であるが、このクラス(現5学年)は

今のところ脱落者は一人も出ていない。にもかかわらず、4学年末では学力入学者が平均点を上回ってしまっている。考えられることは、中退や留年を招くほどの成績不振者はいないが、学年末平均点が常に80点以上を上回る優秀な推薦入学者も少ないということである。

②成績の極端な落ち込みが目立つケース：学力入学よりも上位に位置しているものの、ある学年において平均点の落ち込みが激しいクラスがある。ここでは、3点以上の低下を射程範囲に入れることにする。

「平成6年度入学・情報」、「平成7年度入学・商船」、「平成8年度入学・商船」、「平成9年度入学・商船」、「平成10年度入学・電子」、「平成12年度入学・商船」、「平成12年度入学・情報」が該当クラスだと思われる。商船学科にこのケースに当てはまるクラスが多いということに気づく。

「平成6年度入学・情報」、「平成7年度入学・商船」、「平成8年度入学・商船」及び「平成12年度入学・情報」は、いずれも落ち込みが著しい4学年・3学年で、それぞれ中退者が出ており、該当学生の平均点が両者とも60点に達しないという結果であったために発生したと考えられる。「平成9年度入学・商船」と「平成10年度入学・電子」は前項で述べたとおりである。「平成12年度入学・商船」(現4学年)は、4学年では巻き返しているものの、1学年から3学年までは低下の一途をたどっていることが気になる。

年度別・学科別によるそれぞれの成績の推移を検証したとき、例外のない法則というような一目瞭然の結果は残念ながら得られない。しかし、その中でも調査対象となった10年間において気づいたことをまとめてみたい。

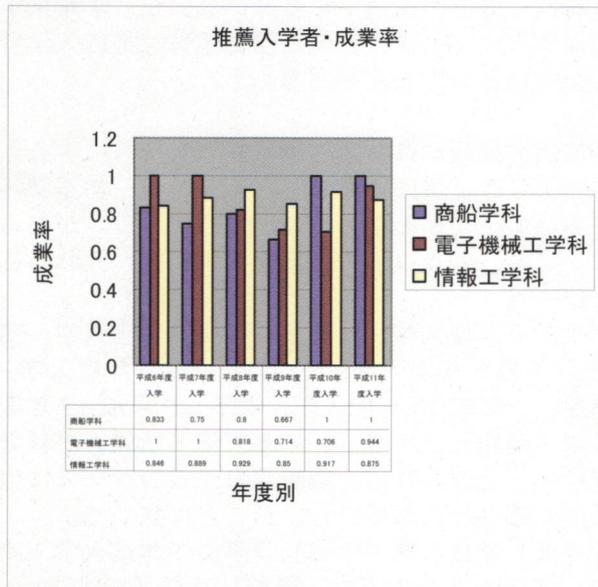
推薦入学者の平均点が落ち込む原因としては、次の2点が考えられるのではないか。一つは、3学科ともに言えることであるが、留年者や成績不振による中退者が発生した学年では、推薦入学全体の平均点が低下する。但し、これを言い換えるなら、そのような成績不振者の存在をカバーできるほど、自己の成績を急上昇させる推薦入学生も残念ながらほとんどいないということである。二つめは、特に脱落者が存在しない場合でも、そのクラスの推薦入学全体の成績が中途半端で、優秀な学生が少ない場合も推薦入学全体の平均は低迷するということである。

3. 推薦入学における成業率

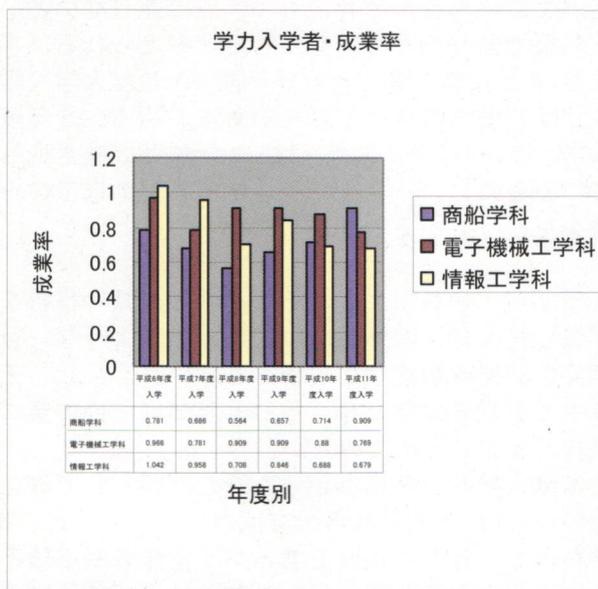
本章では、推薦入学者の成業率を学力入学者と

比較しながら考察していきたい³⁾。

推薦入学者の成業率



学力入学者の成業率



推薦入学者の場合は、入学時の人数と卒業時の人数が一致している状態、つまり、成業率が1の状態を達成している年度は、「平成6年度入学・電子」、「平成7年度入学・電子」、「平成10年度入学・商船」、「平成11年度入学・商船」の4クラスである。対して、学力入学者に関しては、成業率が1に達しているのは「平成6年度入学・情報」だけである⁴⁾。この数値から判明することは、学力入学者よりは推薦入学者の方が成業率は高いということであろう。しかしながら、一見した表

面上だけの数値で簡単に割り切れる問題でもなかろう。商船学科の場合、特に平成9年度以前の入学では、推薦入学者の成業率が低いことがわかる。これは、商船学科における推薦入学者の数が、他学科に比べて小数であることが招く結果であろう。推薦入学者の在籍者数グラフが示すように、商船学科は、電子機械工学科や情報工学科に比較すると、推薦で入学する学生が少ない。このように、もともとの人数が僅少の場合、一人でも脱落者が発生すると、そのクラスの成業率は他学科に比べて激しく落ち込むということがわかるだろう。同じことは平均点にも当てはまるだろう。

さらに、成業率のグラフが示すことは、推薦入学者では、情報工学科が概ね0.8以上を保っているのに対して、電子機械工学科の成業率は1の年度がある一方で0.8以下の年度もあるというように変動が激しい。対して、学力入学者の場合は、電子・情報ともに0.7を下回る年度はあるものの、推薦では比較的安定していた情報が学力では0.6台を出すなど、電子に比べて変動が激しいようである。

学力入学者では、全体の人数が多いこともあって、成業率100%を達成することは至難の業である。しかし、推薦入学者の場合、成績不振が原因で成業率100%が達成し得ないというのは問題があると考えられるのではないか。その他の理由ならいざ知らず、「推薦」された学生が成績不振で学業を無事に修了できないはずがない。これは、冒頭で述べたように、推薦する側の中学校が「推薦」に対する正常な機能を失ってしまっているとしたか考えようがなかろう。次章では、今後このような事態をできるだけ回避できるように、推薦入学者の問題点と有効性について分析したい。

4. 推薦入学者の問題点と質的信憑性

本章では、推薦入学者の問題点と有効性について考察する。

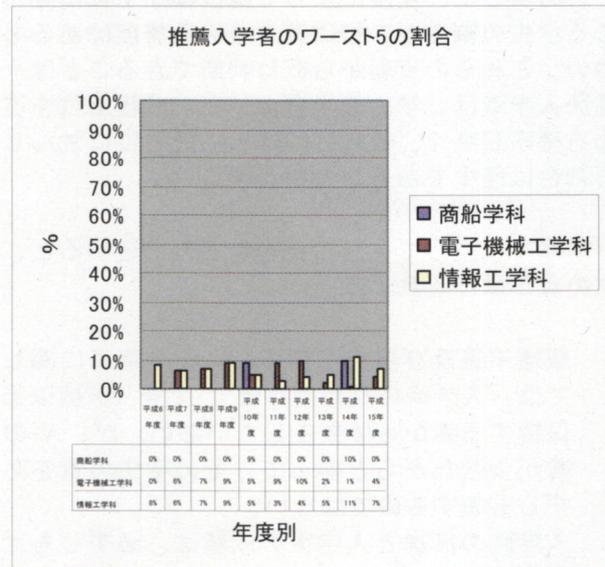
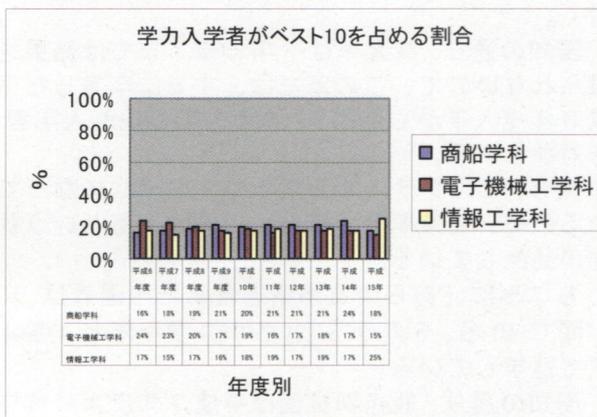
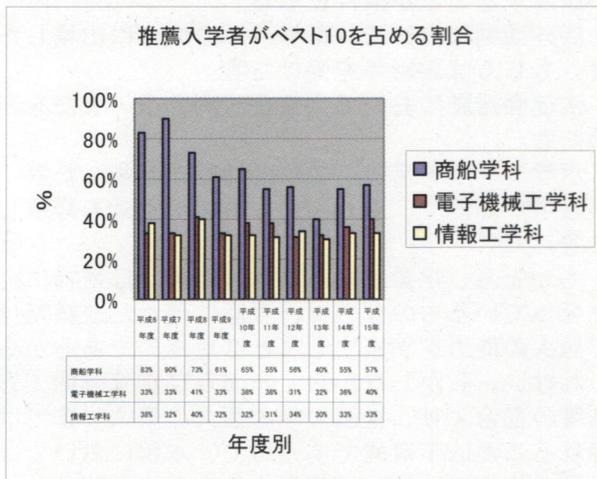
推薦入学者を受け入れる側として最も回避したいと思われる成績不振及び素行不良による脱落者について見てみよう。10年間の推薦入学者の中で、成績不振及び素行不良で中退したものは26名に上る⁵⁾。

まず観点別評価について考察してみたい⁶⁾。脱落者の中で、評価におけるAの数が5個以下にとどまる者は5名のみであるが、逆に20以上ある者も1名しかいない。このことから察せられるのは、Aの個数は決定的な判断材料になるというわけではないが、20個以上を保持するものは「無難」ということは言えるかもしれない。

入学時の席次はどうであろうか。成績不振によ

る中退者 26 名のうち、入学時の席次⁷⁾が 10 位以内に入っている者が 7 名いるが、驚くべきことは、この中で 1 位で入学した者が 2 名、2 位で入学したものが 1 名いることである。さらに、中退者の中で、ビリから 5 位以内に位置する者は 1 名しかいない。逆に、入学時における席次がビリから 5 位以内であっても、入学後に常に「優」を保持している学生は 4 名いる⁸⁾。筆者が感じたことは、入学時の席次と入学後の成績は必ずしも比例するものではないということである。上位で入学した者でも、学業面での能力以外で様々な事柄が発生した場合、それが成績の低下を招くことも考えられる。反対に、上記の 4 名のように、下位で入学した者でも、入学後に学力を伸ばしていく学生もいるだろう。このように入学時と入学後の状態が逆転することは、今回の追跡調査の結果から判断するなら充分にあり得ることではないか。

さて、以下に示すグラフは、推薦入学者と学力入学者の成績がそれぞれのクラスでベスト 10 を占める割合を 5 学年をまとめて学科別に示したものである。さらに、その次に挙げるグラフは、各年度でワースト 5 に位置する推薦入学者の割合をやはり学科別に 5 学年全体で示している⁹⁾。



グラフが示すところから気づくことを挙げると、もっとも顕著なことは、商船学科の推薦入学者は成績上位に入る確立が非常に高く、それを裏付けるように、ワースト 5 に甘んじる者は極めて少数だということだろう。また、推薦入学者ベスト 10 のグラフでは、平成 6 年度と平成 12 年度以外は、電子機械工学科の方が情報工学科を上回ってベスト 10 にランクしている。一方、学力入学者ベスト 10 の方は、電子機械工学科は平成 10 年度以前には情報工学科よりも上回っているものの、平成 11 年度以降は情報と並ぶか、あるいはそれよりも下回っていることがわかる。

さらに、ワースト 5 のグラフを検討してみると、パーセンテージが二桁に及んでいる年度は、平成 12 年度の電子機械工学科と平成 14 年度の商船学科・情報工学科である。平成 12 年度・電子機械工学科の構成は、年度入学で言い換えると、平成 8 年度入学から平成 12 年度入学の電子機械工学科の学生で構成されている。第 2 章で考察したように、その中でも、平成 8 年度入学生・平成 10 年度入学生・平成 12 年度入学生の 3 クラスが、学力入学者よりも学年末平均点が下回るか、あるいは成績の極端な落ち込みがあったクラスである。また、平成 14 年度・商船学科、情報工学科は、ともに平成 10 年度入学から平成 14 年度入学の学生で構成されている。それぞれを検討すると、商船学科は、先に示した平均点の推移を示す折れ線グラフを参照すると、平成 10 年度入学から 13 年度入学まで、緩やかではあるが下降線を辿っているか、あるいは一時期で落ち込みが目立つかのどちらかに当てはまっている¹⁰⁾。情報工学科は、平成 11 年度入学と 12 年度入学が 2 章で挙げたように成績の低下が目立っている。

このように、年度によっては成績が下位に甘んじる学生の割合が二桁に達している年度はあるものの、これらの資料から概ね判断できることは、推薦入学者は、学力入学者よりも、成績上位を占める確率が高く、それに呼応して最下位に甘んじる割合は僅少であることがわかる¹⁾。

本章で検証してきたことをまとめて述べると、次の点が挙げられよう。

- ・ 成績不振及び素行不良等による中退者に関しては、入学時の観点別評価で A を 20 個以上保持する者からは発生していない。が、A の数が少数だからと言って、その学生の質を必ずしも表すものではない。
- ・ 入学時の席次と入学後の成績は、必ずしも比例するものではない。
- ・ 推薦入学者の成績は、学力入学者に比較すると、ベスト 10 に入る割合が高い。特に、商船学科ではそれが顕著である。

5. 終わりに

平均点・在籍者数・成業率・席次などの視点から考察してきた結果、言えることは「推薦入学者の方が学力入学者よりも成績に関しては上回る場合が多い」ということであるが、残念ながら、これは「例外なしの法則」ではない。あくまでも相対的な結果であって、既述してきたように、例外の学生も存在するし、そのような学生が複数名に及ぶような年度もある。しかし、前章で言及したことと重複するかもしれないが、商船学科の推薦入学者の成績が上位に占める割合が高いことは、一つのことを物語っていると言えよう。それは、人数が少ないこともあるかもしれないが、商船学科は他の二学科に比べて専門性における特性が明確で、推薦基準に値するような志望者は自己の適性を判断しやすく、その上で目的意識を持って入学してくるということが言えないだろうか。つまり、特に推薦入学において重要視すべきは、志望者の目的・動機がどれだけ明確であるかということを受け入れる側の我々が的確に判断することであろう。その際、推薦書などの書類等はどれもが大して当てにはなるまい。「まじめな授業態度である」とか、「積極的な学習態度である」、「学習意欲が高い」、「礼儀正しく、常に前向きな姿勢で何事にも臨む」など、誰でも書くような当たり前のほめ言葉しか登場しないからである。すなわち、書類に書かれていることがどの程度真実かを判断するには、直接本人と対面する「面接」、もしくは本人の思考力が多少でも表れるであろう「作文」

をにおいて他にはない。そして、日常から我々がなすべきことは、求める学生像を常に具体的に表示し、中学校から納得の得られる指針を作成することであろう。志望者を送り出す側の中学校とそれを受け入れる側の我々の関係を円滑に機能させるには、受け入れる側の求める学生像の明確化は欠かせない要素だと考えられる。本校が求める学生像に対しての推薦条件を提示し—これは、一般的な成績の基準だけではなく、それぞれの学科に対しての適性なども含めてであるが—中学校側がその条件に合致した学生を送り込んでくる…これは現段階では理想に過ぎないかもしれないが、本来の「推薦入学」とはそういうものではないか。

謝辞

本報告を作成するに当たって、必要資料の提供に協力して下さった学生課教務係の中村昭治教務係長、田中豪氏、杉山美紀氏にお礼を申し上げます。お忙しい中、ありがとうございました。

注

1) 五段階評定で 3.5 以上の者に関しても、門戸が開かれている。但し、その場合は以下のいずれかの該当することが条件となる。

・ 課外活動において、県レベルの大会に出場した者、もしくは表彰等を受けた者。

・ 生徒会活動において、会長・副会長・書記を務めた者。

・ ボランティア活動等の校外活動を経験した者。

・ 語学が堪能で、海外における学習活動を経験した者。

2) もっとも、学業成績と日常の私生活は密接に絡み合っているものなので、表面に現れた成績だけで個人の能力を判断することは短絡的であるかもしれない。しかしながら、紙面及び調査時間・方法等の都合より、推薦入学者個人の事情にまでは触れることは不可能であるので、本稿においては学業成績のみに絞って報告することをお断りしておく。

3) 周知の通り、成業率は 5 学年修了までは結果を得られないので、この章では、すでに卒業した平成 6 年度入学から平成 11 年度入学の推薦入学者を対象とする。

4) 但し、このクラスは 2 学年で 1 名増しになっているので、成業率の計算上は 1 を超えるという状態が発生している。

5) ちなみに、あらゆる事情を含めた中退者は 10 年間で 40 名、そのうち 28 名が 3 学年末と 4 学年末で退学している。

6) 周知の通り、観点別評価は平成 7 年度より実施

されたので、平成6年度入学者に関しては考慮の対象になっていないことをお断りしておく。

7) ここで言う「席次」はその年の推薦入学者全体の席次であって、学科別による席次ではない。

8) 4名の出身中学校の内訳は、2名が九州地方、2名が近郊の中学校である。

9) 本来なら、5学年全体をまとめたものではなく、クラスごとに割合を示すべきであるが、ここでは紙面の都合上、学科別・年度による5学年全体のみ示すことにする。

10) 平成14年度入学生と平成15年度入学生については、先述したように、在籍年数が短いので、グラフは省略した。

11) 但し、ここで留意しておくべきことは、推薦入学者の場合、成績が席次の上ではワースト5であっても、学年末における平均点が60点を下回っている者はほとんどいないということである。

